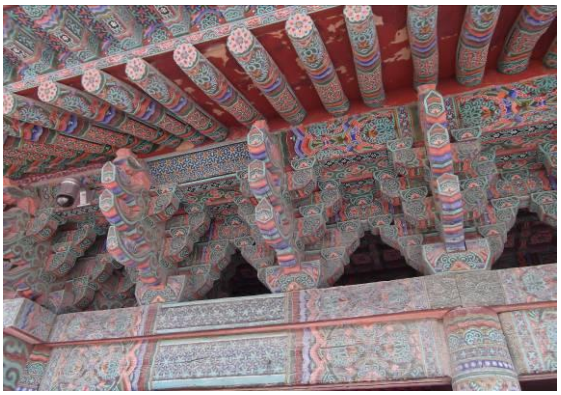
友人諸賢兄姉　　平成23年8月25日

北田泰治

韓国見聞録

５月２３日から４日間、丸橋夫妻、安西博君の４人で韓国に行ってきました。この企画は今年の初めに決めましたが、大震災と小生の入院騒ぎでペンディングになっていました。体調もほぼ正常に戻ったので、気分転換と英気を養うことを目的に思いきって行ってきました。



小生にとっては23年ぶりの韓国訪問となりました。今回は、その後の変化と朝鮮の歴史を確認するのがもうひとつの目的でした。ソウルから水原、慶州、釜山など主要都市を巡ってきました。新幹線にも乗りました。最終日はソウルに戻り、丸橋君のビジネスパートナーだった現地のオーナー社長の接待で、豪華な昼食をご馳走になりました。

この23年間で韓国は大きく変わりました。先ずその変化について述べ、次に韓国の歴史について触れたいと思います。最後に伝統文化について感想を述べることにします。

１．韓国の変化

（1） めざましい発展

真っ先に目についたのは、女性がきれいになり、交通マナーがよくなったことです。これは国民生活が豊かになったなによりの証しです。

前回訪れたのは、ソウルオリンピックの前年でした。オリンピック開催に向けた建設工事が急ピッチで行われていて、交通渋滞がひどかったことが印象に残っています。初日に泊ったホテルは、漢江の南側にあった「Num Seoul hotel」という小奇麗なプチホテルでした。

この周辺は閑静な住宅街でした。ホテルから漢江が眼下に見渡せ、その先にはソウルの中心街が一望できました。ソウル市内に行くには車で漢江大橋を渡らなければなりませんでした。

それがどうでしょう江南（漢江の南側）地域は、高級マンションが林立し、高級街として知られるニュータウンに変貌しました。30坪のマンションが、地方では3千万から5千万円なのに、この周辺は1億

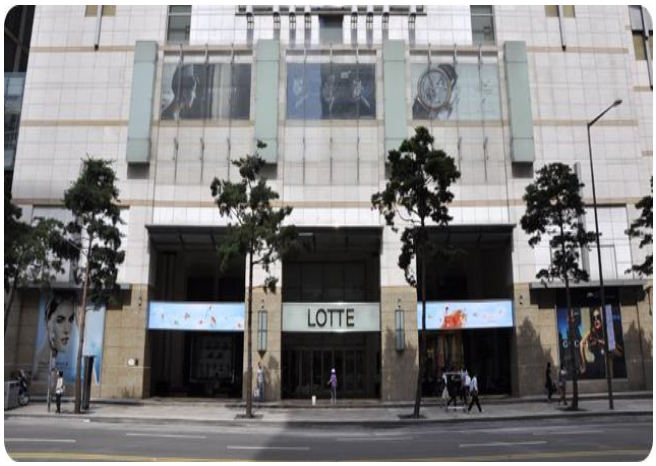
から2億円だそうです。地下鉄も4路線が乗り入れ交通至便になりました。高級ホテルや高級ブランドショップも多数進出し、セレブが闊歩するソウルで最もおしゃれなエリアになりました。

開発ラッシュはソウルに止まりません。地方都市でも近代的な高層アパートが競うように建っています。高速道路網も全域に広がりました。ところにより片側6車線もありスムーズです。KTX という韓国の新幹線も開通しました。

車線が広いのは、いざという時に戦闘機が離発着できるからと以前聞きました。戒厳令こそ解除されましたが、北朝鮮との軍事対決は今も続いています。兵役もあります。繁栄の陰に厳しい国際情勢に晒されていることを、改めて思い起こしました。

韓国も車社会となり、高級車が目立ちます。軽自動車や小型車はほとんど見かけません。現代自動車と起亜自動車が圧倒的で、日本車は数えるほどしかありません。愛国心が強いのか、見栄っ張りが多いのか、真意はわかりません。もっとも日本でも韓国車はほとんど見かけませんが。高級車といい億ションといい、よく金があるものだと感心します。

空港も駅もデパートも、日本よりはるかに近代的で機能的です。韓国を代表するロッテデパートに行きました。地下の食品売り場を除いて、店員はすべて若い子です。イケメンとカワイコちゃんを揃えています。礼儀正しく、勧誘セールスなどはしません。デパート全盛時代の三越や高島屋などを彷彿させます。



最も大きな変化は、人が変わったことです。

かつての韓国人男性は目が釣りあがり、日本人に対し強烈な敵愾心がありました。それに比べ女性は儒教の影響で立ち居振る舞いが控え目でした。経済発展の結果、男性は穏やかになりました。ヨン様ばりのイケメンを沢山見かけます。荒々しさが失われました。反対に女性は逞しくなり”かかあ天下”になりました。姑と一緒に住むことも亭主にかしずくことも嫌がり、核家族化が進んでいます。儒教は衰退しました。

地下鉄に乗ると席を譲ってくれます。日本よりはるかに敬老精神があります。道に迷っていると、親切に声を掛けてくれます。明らかに態度が変化したのが見てとれます。この原因がどこからきたのか、経済発展だけとは思えません。

近くて遠い国、それは韓国でした。その理由はいくつもありますが、最も大きいのは反日感情でしょう。それを打ち破ったのはヨン様でした。韓流ブームを惹き起こし、オバサマ族を一気に韓国贔屓へと導きました。

ヨン様は日韓親善を促進した文化人として、文化勲章ものの貢献を果たしました。どちらかと言えば、暗いイメージの強かった韓国が、ヨン様の出現で明るいイメージに転換しました。一介の俳優（失礼！）が、国のイメージを大きく変えました。これは歴代の政権が成しえなかったことで、古来稀（大袈裟？）なことであります。

日本人観光客の70％は、オバサマを中心にした女性です。韓流ブームとエステを目的に韓国を訪れています。ドラマと歴史を重ねながら、ガイドと楽しそうに渡り合っています。反日感情などまったく感じさせない国になりました。

これらの変化は通りすがりの旅行者が、表面的に感じた印象に過ぎません。韓国の実態はどうなのでしょうか。

ご接待いただいた崔社長によれば、韓国は閉鎖的で一族郎党の結束力が強く、他の氏族が入り込める余地が少ないとのことです。成功者はその一族に限られ、貧富の差が大きい格差社会だといっていました。 日本の方がはるかに平等で、機会均等の社会だともいっていました。厚生年金のような制度は遅れています。皆保険制度はありません。任意で入っても、月平均5万円ぐらいで、最高でも9万円だそうです。韓国人は老後の不安を抱えているといっていました。

（2） 韓国の大統領

なぜか韓国では、大統領の悲劇が続いてきました。例えば、亡命（李承晩）や暗殺（朴正熙）、投獄（全斗煥、盧泰愚、金泳三）、自殺（盧武鉉）などです。これは血縁、地縁、学縁などの縁故主義が背景だといわれています。政治的には「権威主義対民主化勢力」、「慶尚道対全羅道」の対立が続いてきました。

拉致事件で有名な金大中は全羅南道の出身です。全羅道はかつての百済です。この土地の人は全羅道出身の候補者以外には絶対に投票しない、とガイドはいっていました。それほど結束力の強い土地柄のようです。百済は高句麗と新羅に滅ぼされました。そのことが高句麗と新羅に反感と対抗意識を持っている理由かもしれません。

これは全羅道に限りません。慶尚道はかつての新羅です。この地域から出た大統領は朴正熙、全斗煥、盧泰愚、金泳三、盧武鉉と多数派を占めています。三国時代最後の王朝出身という自負があるのでしょうか。

第16代大統領盧武鉉は、慶尚道すなわち新羅出身の大統領です。この地の出身者は伝統的に保守派（旧守派）ですが、彼は金大中（進歩派）の与党から大統領になった異色の大統領です。日本ではあまり知名度はありませんが、韓国では国民的な人気が高かった大統領です。

彼は「世の中にどんな不正があっても、どんな不条理が目の前に起きても、強い者が弱い者を不当に踏みつけても知らん顔し、強い者に頭を下げて、その事実から顔をそむけなければならなかった。それが韓国の歴史だった。こんな歴史を清算しなければならない。」と主張しました。

人権派弁護士だった経験を基に、軍事独裁時代の人権侵害や虐殺事件を調査することを公約にしました。また「脱権威主義」を目指し、親日派の癒着構造にもメスを入れようとしました。

こうした正義感が大衆の人気を得た理由ですが、それよりも彼の出自が共感を呼びました。彼は貧困家庭に生まれ、大学へ進学することは出来ませんでした。独学で司法試験に合格し、弁護士資格を取りました。国会議員から長官（大臣）になり、遂に大統領に登りつめました。

歴代大統領は血縁、地縁、学縁があるのに対し、彼は「ドブ川から天に昇った龍」と称され、庶民の中から生まれた大統領として、親近感をもたれ、庶民の希望の星でした。

それだけに彼の自殺は、大きな衝撃を韓国社会に与えました。葬儀は「国民葬」ではなく庶民が主催した「民葬」でした。各地に設けられた焼香台には、延々長蛇の列だったと伝えられています。自殺の原因は不正蓄財だといわれていますが、彼の銀行口座にはわずかの金しかなかったことが明らかになっています。それよりも、彼の政治姿勢が保守派の危機感を呼び、その圧力が死に追いやったのではないかという説があります。

盧武鉉大統領の後に登場したのが、現大統領の李明博です。彼は大阪生まれですが、本貫（韓国の家系）は慶州の李氏と言われ慶尚南道育ちのため、保守派と見做されています。彼も苦学して大学を卒業し、現代建設に入社しました。睡眠4～5時間の猛烈社員として勇名を馳せ、29歳で取締役、36歳で社長に昇進した立志伝中の人物です。

その後、国会議員に転じ、ソウル市長を経て、2008年に第17代大統領に就任しました。韓国の経済発展は朴正熙政権下の1970年代に始まり、1995年には一人当たり国民総生産が1万ドルを突破し、先進国の仲間入りを果たしました。この急速な経済発展は「漢江の奇跡」と呼ばれました。

李明博大統領は、この高度成長期に現代建設の役員として、土地開発、インフラ整備などに関わってきました。特に、江南開発には主導的な役割を果たしたといわれています。

現代史家として著名な韓洪九氏は、「倒れゆく韓国」の中で次のように述べています。

『韓国は経済構造上、建築業、土建業の比率が高く、産業構造自体が先進国型ではない、経済先進化を進めるためには、1970年代、1980年代の土建国家マインドから抜け出さなければならない、しかし、土建マインドが骨の髄まで染み込んだ人を大統領に選んだ、李明博は土建国家時代に現代建設社長として行動隊長だった。

朴正熙、全斗煥時代に土建開発が本格化し、軍人や工兵出身者が動員され、市長になったり、建設会社をつくったりして、韓国は土建国家に変貌した。金もコネもない人たち、情報がない人たちは、投機競争からはじかれ、マイホームすら手に入れることが難しい境遇に置かれることになった。

李明博政権が発足後、2008年にキャンドル集会事件が起きた。支持率が7．4%まで下がり、7月に退任という観測が流れた。就任3ヶ月で支持率が1ケタまで落ちた例はない。その後、保守層が政権支持に変り、20%台に回復した。保守層は、李は憎いがそれよりもキャンドル集会はもっと危険と

判断し、李を後押しするため結集した。しかし、支持率は20％前後で推移している。李は守旧集団、保守勢力に支持を訴えるしか方法がないことに気づき、彼等を結集させるさまざまな手段を使っている。李明博は、大衆の心をつかむ政策はひとつもない。国民の支持を受ける意思も能力もまったくない。韓国は歴史の逆戻りをしている』

と手厳しく批判しています。

電機や自動車、造船などの躍進ぶりを見ると、土建国家と決めつける韓氏等の批判には、違和感がないわけではありません。しかし、江南開発にまつわるゴシップには、さもありなんと思わせる実態があります。

朝鮮戦争の時、首都ソウルはわずか3日で陥落しました。このことに危機感を抱いた軍人出身の朴正熙大統領は、安全保障と人口増に対処するため、ソウル一極集中を排除することを決心し、それが江南開発につながったといわれています。

江南の土地成金を指す言葉に「江福者」というのがあります。李明博政権の閣僚が、江南に多くの不動産を所有していることから流行語になったそうです。これと似た言葉に「福夫人」があります。これは不動産投資で稼ぐ主婦を指した言葉です。土地転がしやマンション転がしで、新興のにわか成金が続出しました。

土地で儲けるためには情報が必要です。そこで政財界の癒着が生まれます。土建国家を推進した政権と、深く結びついた少数の人たちが、うまい汁を吸い、旧い身分制度が崩壊して、新しい身分制度が誕生しました。その典型的な開発が江南の不動産開発でした。

韓国は朝鮮戦争によって、王朝時代から続いた両班などの身分制度が崩壊しました。 前線で戦う兵士に、旧い身分制度は関係なかったからです。それに代わって台頭したのが、土建国家構造と結びついた新ブルジョアでした。政権に近い一握りの人に富が偏在し、貧富の差が拡大しました。伝統的な社会構造、規範が大きく変わりました。李政権は金持ちのための政治を行っていると批判されるのは、このような背景があるからでしょう。

韓国には進歩勢力と保守勢力があります。しかし、実際には保守勢力が勝ち続けてきました。進歩派の金大中と盧武鉉が2代続けて当選し、過去の清算に意欲を示しました。危機感を抱いた旧守派が巻き返しを図り、ニューライトという新保守勢力が台頭してきたといわれています。それが李明博政権です。

李明博政権は「富裕層重視」のイメージが強く、地方選で負け続けてきました。次の総選挙でも苦戦は確実と言われています。それを打破するため「福祉重視」政策を掲げ「庶民重視」へシフトしようとしています。

李大統領は、わが菅総理と同様支持率低迷とレイムダック化に喘いでいます。しかし、菅さんとの決定的な違いは、経済的な決断力でしょう。EUとのFTAを締結したり、中東に原発を売り込んだり、冬季五輪の誘致に成功したりと、その行動力、決断力は菅さんの遠く及ばないところです。李大統領は政治家としてよりも経営者としてのセンスが秀でています。まさに元企業経営者の面目躍如というべきところでしょう。

2. 朝鮮の歴史

（1） 王朝時代

一国の歴史を簡潔に述べることは容易ではありません。朝鮮の歴史を、前後をばっさりカットし、主要な王朝時代だけを抜き出すと次のようになります。（カッコ内は、日本の時代）

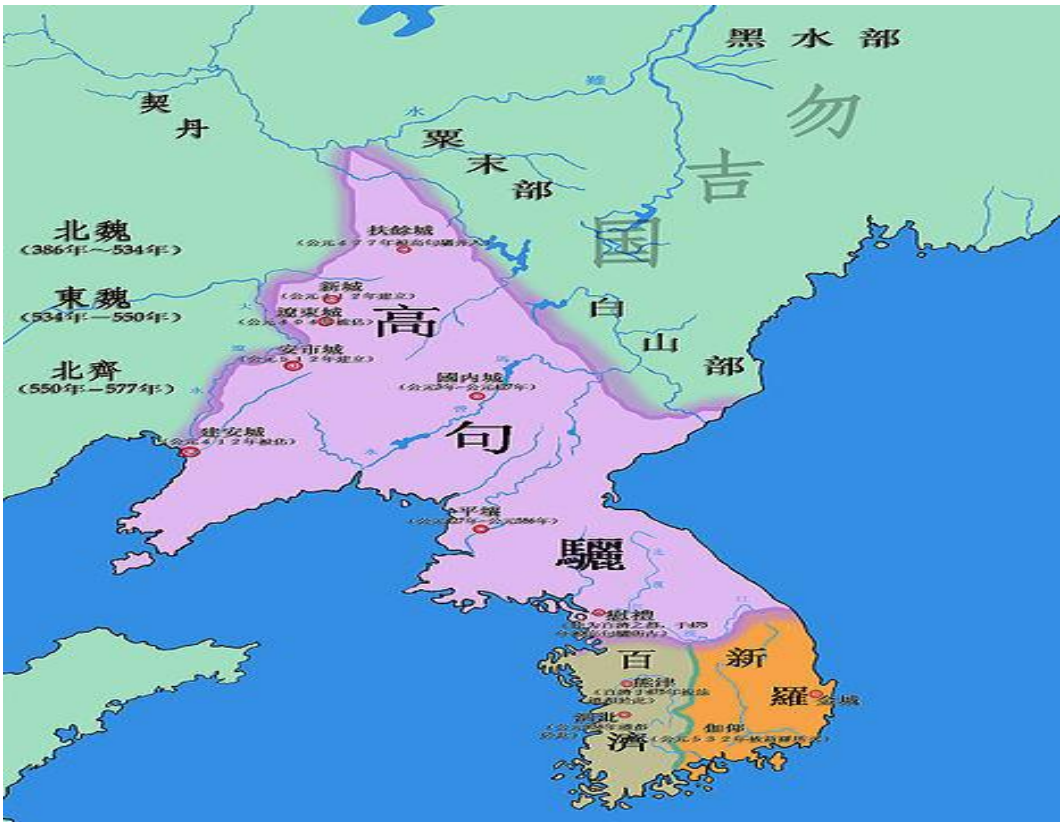
三国時代（大和・古墳時代）→ 統一新羅時代（奈良時代）→ 高麗時代（平安・鎌倉時代）→ 朝鮮（李朝）時代（室町・安土桃山時代）です。

高句麗、百済、新羅が鼎立して競った時代が三国時代です。新羅が高句麗、百済を破り、初めて朝鮮半島の統一を成し遂げます。これが統一新羅時代です。それに続いて高麗時代、 朝鮮（李朝）時代と続きます。朝鮮時代は、李成桂が朝鮮王朝を開いたことから李朝とも呼ばれています。この見聞録では「李朝」を使います。

朝鮮とわが国の歴史的、文化的交流は深く、いたるところに古代から伝わる朝鮮文化が今も生き続いています。たとえば、高麗神社、百済神社、新羅神社が各地にあります。神社の社殿におかれた狛犬も本来は「高麗の犬」から来たといわれています。

日本人にとって高句麗、百済、新羅は馴染みの深い名前です。それは、三国を通じて日本に伝えられた文化や日本の制度・社会に与えた影響が大きいからです。

この見聞録では、日本人に馴染みの深い三国時代に絞り、日本との関係についておさらいしたいと思います。



① 高句麗 （BC37～668）

高句麗と古代日本は古くから海をへだてて対岸交流を行ってきました。この海の道を通って高句麗の壁画文化とその思想が伝わりました。高句麗は、中国の儒学や仏教をとり入れ、国家の秩序を整えました。これらの制度は日本にも導入されました。

奈良県明日香村のキトラ古墳の天文図や高松塚壁画に描かれた飛鳥美人像、東西南北の方角を守護する四神像などは、高句麗壁画古墳群の中で形成された天文図、人物風俗図、四神図が原本といわれています。

西壁　女子群像

天文図

明日香村には、飛鳥寺として知られる法興寺があります。この寺院は高句麗様式といわれています。法興寺の最初の住職は高句麗から渡来した高僧・慧慈です。慧慈は若き日の聖徳太子を20年にわたって教え、導いた師であり、高句麗の優れた知識人でした。

高句麗は5世紀末には、現在の中国東北地方と朝鮮半島のおよそ半分を支配する一大王国となりました。吉林省の集安付近と北朝鮮の平壌付近には数多くの古墳が残っていて、これらは「高句麗壁画古墳群」として世界遺産になっています。積石式と呼ばれる高句麗独特の古墳のつくり方は、日本の古墳づくりにも大きな影響を与えました。

福島県西白河郡島崎村の原山1号墳から裸に褌姿の埴輪の力士像が発見されました。これは日本最古の力士像といわれています。埼玉県行田市の酒巻古墳からも力士埴輪が出土しています。高句麗の古墳には相撲をとっている壁画が描かれていることから、高句麗の影響が関東・東北地方まで及んでいたことが分ります。

② 百済 （BC18～660）

北方で高句麗が活躍していた頃、朝鮮半島の南部では韓族が馬韓、弁韓、辰韓の三韓にわかれていました。馬韓が小部族を統合して出来たのが百済です。

三国の中で倭（日本）と最も緊密な関係を維持したのは百済でした。百済は北の大国高句麗と東の新羅によって圧迫され、都を現在のソウルから公州、扶余に移しました。劣勢を打開するため中国に朝貢して仏教文化をとりいれ、さらに高句麗と新羅に対抗するため、日本と同盟関係を結びました。こうし

て百済の文化や仏教、漢字、墨などが日本に伝わりました。

大和朝廷は百済に援軍を送りますが、唐・新羅連合軍に敗北し百済は660年に滅亡します。百済の王侯貴族や役人、技術者などが大勢日本に亡命しました。王族は大和朝廷の高官に迎えられ百済の制度や文化が持ち込まれました。恒武天皇の母親は百済王族の出自という説があり、天皇家のルーツが朝鮮だという根拠になっています。奈良の大仏は百済王が黄金900万両を寄進し、百済の技術者の指導で建立されたといわれています。

韓国の国立中央博物館に、百済時代の国宝弥勒菩薩半跏思惟像（写真左）があります。右手の薬指を頬にあて物思いにふける姿で知られています。さしずめロダンの“考える人”の仏像版です。これとよく似た弥勒菩薩半跏思惟像が奈良の広隆寺（写真右）にあります。韓国の半跏思惟像は金銅製ですが、広隆寺のそれは木製です。この寺は聖徳太子から贈られた新羅の仏像を安置するためにつくられたといわれています。その像がこれかどうかはわかりません。

百済の高官が飛鳥寺を訪れた時、饗宴のため広場で相撲が行われたと伝えられています。高句麗時代に始まった相撲がこの時代にも引継がれていたことになります。

百済出身の金大中大統領が、天皇陛下を表敬訪問した際、陛下から百済という言葉が3度あったという逸話があります。陛下も百済との歴史的関係を意識されていたのではないかと思います。

百済は中国文化の輸入と伝達に大いに活躍し、洗練された文化をつくりあげました。百済芸術は貴族的な性格が強く、優雅で美意識の洗練されたものでしたが、その一方で土着文化を十分に育成することができなかったといわれています。

余談ですが、“くだらない”という言葉があります。これは“百済無い”からきた言葉だそうです。百済にはありとあらゆる物があり、もし百済にない物があるとすれば、つまらないもの、つまりくだらないものだというのが語源だそうです。それくらい百済の文化は優れているという自負があり、百済人は誇り高い民族だったようです。

日本の前方後円墳は大和時代につくられました。ところが最近になって、韓国でも全羅南道（かつての百済）でいくつかの前方後円墳が発掘され話題になりました。これらの前方後円墳は、6世紀ごろのもので、大和時代以降につくられたようです。日本からの逆輸入ですが、こんなことからも百済との関係の深さがわかります。

③ 新羅 （BC57～935）

馬韓が小国を統合して百済になったように、辰韓が小国を統合して出来たのが新羅です。三国時代は抗争が絶えず、最終的に唐の支援を得た新羅が覇者となり、高句麗と百済は滅亡します。その後唐を排して676年に朝鮮半島を統一、都を慶州に置き、仏教文化を開花させました。これが統一新羅王朝です。

三国時代の文化の中心は仏教でした。新羅の王都となった慶州は、仏教文化の聖地として大きく発展しました。 たくさんの寺院や古墳がつくられ、仏像、石像、装身具、彫刻、壁画など、華麗な文化が今も往時の姿をとどめています。慶州が“壁のない博物館”だといわれる所以です。

新羅の文化は、初期には高句麗の影響を受けましたが、後には百済の影響をより多く受けました。伝統文化との融合をはかりながら、文化的な基盤を広げ、調和美の中に覇気を表すことができたといわれています。日常生活に使った食器形態の新羅土器や土偶のような伝統的で素朴な姿をそのまま表している一方で、半跏思惟像のような美意識のすぐれた美術品も生まれました。

今回訪れた雁鴨池は、池の堤全体を石で堅く積み上げて造られています。ここから新羅時代の仏像、装飾品、青銅のさじなど1万5千点の遺物が出土しました。これらの遺物によって絢爛たる当時の宮中生活と貴族生活の様子を推測することができます。

④ 高麗 （918～1392）

高麗王朝は、開城（ケソン）の豪族だった王建によって創建されました。彼の出身地である開城を首都に定めました。この時代には豪族をはじめ地方勢力が中央の貴族として進出し、文化の主人公として登場しました。彼等は儒教を新しい政治思想として採用し、儒教的政治理念を確立しました。したがって、高麗時代には儒教と漢文学が発達し、個人文集と実録などの編纂が活発でした。また、中国から科挙制度を導入し、中央集権的な官僚国家を建設しました。

仏教は国家の保護を受けてたいへん隆盛でした。高麗中期には義天によって天台宗が盛んになり、後期には知訥によって曹渓宗が大いに発達しました。また、大蔵経の組版と寺院建設など仏教文化が隆盛でした。こうして高麗時代には仏教文化と儒教文化がともに発展しました。

高麗の芸術は貴族生活ならびに仏教美術と連関した工芸分野が発達しました。一方、科学技術の

進展で金属活字、印刷術、天文、暦法、武器製作術なども発達しました。

１231年、モンゴル軍が高麗への侵略を開始、朝鮮本土はモンゴル軍によって蹂躙されます。フビライは朝鮮を拠点に日本制圧を目指します。高麗政権を強制して船、武器、兵員を準備させ、博多湾に侵入します。第1次蒙古来襲です。これは暴風雨によって兵船が大破し、失敗に終わります。７年後の１281年に、再び14万の大軍を率いて日本を攻めます。いわゆる“元寇”です。この時も暴風雨によって、モンゴル軍は撤退します。日本では神風が吹いたと宣伝され、“神国日本”という言葉が定着します。

高麗時代の末期には、モンゴルだけでなく、対馬、北九州、瀬戸内海を根城とする“倭寇（海賊）”によって、朝鮮沿岸が頻繁に襲撃を受けるようになり、国力が急速に衰退していきます。

今回接待いただいた「龍水山」は、この時代の宮廷料理です。

⑤　朝鮮王朝（李朝）（1392～1910）

高麗に代わって新王朝を開いたのは、全羅北道出身の李成桂です。国内外の変動を利用して台頭した李成桂は、1392年に新王朝を創建します。この王朝は李成桂の子孫が代々王位に就いたため、李氏朝鮮とか李朝と呼ばれています。李朝は518年間存続し、東アジアでは例を見ない長期の王朝となりました。徳川幕府の260余年と比べてもその長さがわかります。

高麗は仏教を国教としましたが、李朝では仏教が排斥され朱子学が国教的な位置を占めました。また科挙制度が強化され、文武の官僚はほとんど科挙によって登用されるようになります。官吏に登用された両班は軍役などを免除され、大地主や中央、地方の勢力として国家の行政機構を支えました。

このため李朝は、両班官僚国家とも呼ばれ、両班、常民（農民、商人）、賤民（奴婢）からなる身分制度がいっそう厳しくなっていきました。

李朝が統治政策のひとつとして、民衆に対し儒教教育の普及に努めた結果、儒教意識は民衆の中に浸透していきました。その中で親への孝行、目上の者への礼儀、国王への忠誠、男性に対する女性の服従などが強調されました。

それは道理や信義を重んじ、正義を大切にする気風を生み出しましたが、他方で形式主義に陥り、人間関係における差別の合理化、社会の硬直化をもたらすマイナス面もありました。

李朝は秀吉の侵攻があるまで約200年間天下泰平の時代が続きました。その中で、朝鮮文化は、当時の世界的なレベルからみても注目すべき発展を遂げました。特に、第4代国王世宗の時代は黄金時代といわれています。朝鮮独自の文字であるハングルは世宗の時代に制定されました。

（2） 世界遺産

今回7ヶ所の世界遺産を見ました。いずれも統一新羅時代以降の遺産です。高句麗時代の世界遺産は、中国・北朝鮮にありますが韓国にはありません。百済時代の世界遺産も韓国にはありません。慶州にある古墳群と仏教遺跡群が三国時代唯一の世界遺産です。歴史的に見れば比較的新しい世界遺産です。訪れた順に寸評を述べます。

① 水原華城

李朝時代の1794年、ソウルから都を移す目的でこの地に築いた城塞です。華城行宮と呼ばれる仮宮殿と行政府の建物を中心に、四大門をつないだ全長5．7Kmの城壁で囲まれています。さしずめ韓

国版「万里の長城」といった感じです。

城壁は外敵を防ぐために築かれたため、監視所や砲台、武器弾薬庫などの軍事施設が随所

に配置されています。中庭には練武台という指揮本部があります。練兵場では伝統的な“国弓”を射る体験が出来ます。石材とレンガを併用した近代的な城郭構造が評価され、世界遺産になったそうです。

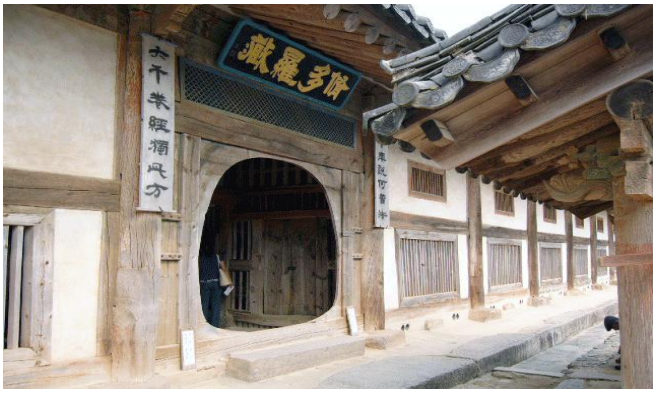
色彩と意匠が面白いですね。

② 海印寺

海印寺は統一新羅時代の802年に建立されました。この寺が有名なのは「八万大蔵経」が収められているからです。この原版はモンゴルの侵攻で焼失し、現在あるのは復刻版です。仏の加護でモンゴルの侵略から国を守るため、高麗が全精力を傾けて作成したのがこの経典です。経典といっても紙ではなく木版です。変形しないように白樺の板を3年間海水に浸し、乾燥させ、両面に14文字×25行の経文を彫り込み、漆で仕上げました。

その木版が8万1240枚あることから「八万大蔵経」と呼ばれています。この木版から印刷された大蔵経は室町時代に日本に渡り、完本に近いものが増上寺と東本願寺に残っているそうです。丸橋君も記念にコピーを1枚買いました。

海印寺は標高1430mの伽倻山の中腹にあります。鬱蒼とした木々と清らかなせせらぎが流れる静寂な佇まいです。涼しい上に、蔵経殿は校倉作りのため、風通しのよい天然の換気装置になっています。場所の選定といい、変形防止対策といい、先人の知恵のすばらしさを感じます。



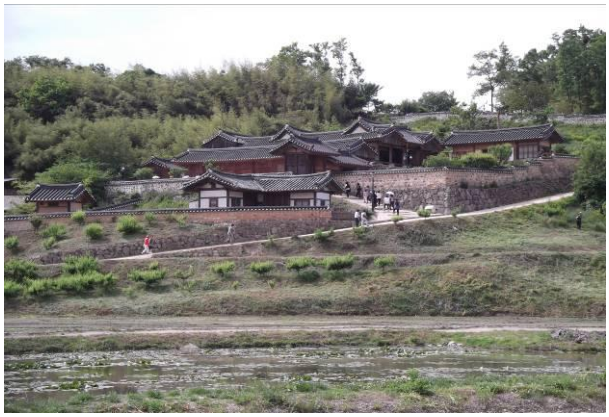
③　良洞村

私が最も楽しみにしていたのは、この村でした。李朝時代初期（1392）の伝統的な古い家屋150軒余りが当時のままの状態で残っています。この村は、昨年世界遺産に登録された韓国では最も新しい世界遺産です。イメージ的には岐阜の白川郷といったところでしょう。

高台には両班と呼ばれた支配階級の人が住んでいた豪壮な瓦屋根の屋敷があります。平地には庶民の萱葺き屋根の家があります。茸のような独特の丸い屋根です。せいぜい2間ほどの小さい家です。明らかに身分の違いが見て取れます。

小高い丘から眺めると、村の全景が見渡せます。周囲を山々に囲まれ、小川が流れています。田畑の中に古い家屋が点在しています。まるでタイムスリップしたようなのどかな田園風景です。

この時代、中国から科挙制度が導入され、この村でも学問所を設けて教育に力を入れました。優秀な人材は村を挙げて支援し、中央に送りました。この村から儒学者で東方五賢の一人と呼ばれた晦斎や李彦迪など多くの俊才が輩出されています。才能のある子を一家や一族が財産を投げ打って支援する風習は今も韓国社会に残っているようです。



600年前の原風景を感じる村ですが、率直に言えば期待外れでした。その理由は保存状態がよくないことです。家屋は昔ながらの木造、萱葺き屋根ですが、その家にテレビのアンテナが立っていたり、エアコンの室外機が設置されていたり、庭には耕運機が置いてあるなど、風景がちぐはぐです。現在も居住者がいることからすればムリからぬことです。

日本では電線を地中に埋めたり、勝手な改造は禁じたり、厳しい保護規制があります。世界遺産として、観光の目玉にするなら、保存状態を改善することが必要でしょう。

④ 仏国寺

仏国寺は統一新羅時代に建立された韓国を代表する名刹です。放火や廃仏政策によってもともとの建物はなくなり、現在あるのは復元されたものです。創建当時に比べると10分の1だそうですが、それでも大きな敷地です。

この寺院の特徴は、石組みを隔てて上が仏国、下が現世を表していることです。正面入口の紫霞門をくぐると仏の国となります。境内は3つの領域に分かれています。釈迦如来の大雄殿、阿弥陀仏の極楽殿そして昆盧舎那如来の昆盧殿です。釈迦如来も阿弥陀仏も国宝です。

この寺院の見所は、大雄殿とその前庭にある2つの石塔です。いずれも新羅仏教芸術の粋といわれ国宝に指定されています。右に多宝塔、左に釈迦塔が立っています。多宝塔は高さ10.4m、花崗岩を精巧に組み合わせた木造建築を思わす独創的な石塔です。釈迦塔は高さ8.4mで、三層造りの石塔です。シンプルながら重厚で安定感があります。この時代を代表する石工の作といわれています。対照的な石塔ですが、当時の美意識の高さを感じます。

⑤ 雁鴨池

今回訪れた雁鴨池、海印寺、仏国寺は新羅時代の建造物で、世界遺産になっています。雁鴨池そのものは世界遺産ではありません。慶州歴史地域が世界遺産になっていることから、その一部として観光スポットになっています。新羅王朝の674年に建築された離宮です。人工池には中国の名山をかたどった山が築かれ、珍しい樹木を植え、鳥や魚を放ったといわれています。

池の傍には1000人を収容する大ホールがあって、夜な夜な大宴会が開かれたようです。新羅王朝絶頂期には、王族は贅沢な生活を送り、宮殿を造ることに関心がありました。この池から出土した1万5千点の遺物は、当時の王族の生活振りを示す絢爛・豪華なものです。雁鴨池は栄華を映す夢の跡です。

今ある建物は、縮小して復元したものです。建物の中には出土した装身具や食器類の一部が展示されています。夜はライトアップして、家族連れや若者達の憩いの場となっています。

⑥ 昌徳宮

李朝時代の1405年に景福宮の離宮として建てられました。景福宮が火災によって焼出し、それが再建されるまで王宮として使用されました。外国使節の謁見や朝賀の礼などが行われました。この離宮も戦火や火災でたびたび焼失しましたが、その都度復旧されました。韓国内に現存する宮殿の中で、最も創建時の面影を残していることから世界遺産に登録されました。

正殿の仁政殿は、重層入母屋づくりの重厚な建物です。青瓦台の大統領官邸を思わす外観です。宮廷内にある秘苑は韓国を代表する庭園として有名です。

李朝のラストエンペラー純宗と日本の梨本宮家から嫁ぎ李朝最後の皇太子妃となった李方子が晩年を過したところとして知られています。韓流ドラマ「宮廷女官チャングムの誓い」の舞台となったことか

ら、日本のオバサマ達の関心が高いところです。私はこの種のドラマは見ませんので、筋書きも登場人物もまるっきりわかりません。安西君と女官の部屋を覗き見していました。

⑦ 宣陵

李朝時代の王陵は全部で40基あります。そのほとんどはソウル近郊に分布しています。それは都から40km圏内に建てるという決まりがあったためです。宣陵は、高級住宅地に変貌した江南地区の中心部にある王陵です。当時は自然豊かな緑地地帯だったと思われますが、今では高層ビルに囲まれた公園になっています。

ここに9代王成宗と11代王中宗の墓があることから宣靖陵とも呼ばれています。また成宗の側室で中宗の母貞顕王后の墓もあるので、三陵公園とも言われています。中宗は「宮廷女官チャングムの誓い」に登場する王です。

王の墓というと前方後円墳など大型のお墓を想像しますが、ここの王陵はお饅頭型のこんもりした小さなお墓です。周囲は十二支の神像を彫った護石で囲まれています。両班官僚国家を象徴するように、文官と武官の石像が立っています。

3. 伝統文化

（1） 高麗青磁と李朝白磁

私のささやかな趣味は、陶磁器の鑑賞と蒐集です。日本のものでは古伊万里が好きです。中国の陶磁器は歴史と伝統があり、いずれの時代にも優れた作品がたくさんあります。ベトナム焼きも安南焼と呼ばれ茶人に好まれてきました。

朝鮮モノでは、高麗青磁と李朝白磁が双璧です。秀吉の朝鮮侵攻で多くの陶工が日本に連行され、彼等が日本の陶磁器の基礎を築きました。古伊万里も彼等によって誕生しました。朝鮮陶工の流出で、朝鮮の陶磁器は壊滅的な打撃を受けました。

李朝白磁は後継者を失い、姿を消したと言われています。朝鮮人は青磁に高い評価を与えましたが、白磁にはあまり関心がありませんでした。それは朝廷用の食器は別として、一般的には祭器として使われたことと、死者の副葬品として埋葬されたためです。朝鮮人は、副葬品を穢れたものとして嫌ったからです。

その価値を見出したのは、民芸運動の創始者柳宗悦です。宗悦に李朝陶磁器を紹介したのは、淺川兄弟（伯教、巧）でした。弟の巧は大正３年に朝鮮に渡り、朝鮮総督府の役人になりました。彼は現地に同化しようと朝鮮語を習得し、朝鮮式家屋に住んで、家具や調度品、食器類はすべて朝鮮の民衆が

使用する日常雑貨品を揃え、徹底した朝鮮化の中で生活しました。

彼の家を訪れた宗悦は、朝鮮の工芸品のすばらしさに開眼し、民芸運動へ突き進むきっかけとなりました。宗悦は朝鮮各地を訪れ、李朝の陶磁器を含む工芸品を多数蒐集しました。それらは私物化することなく、ソウルに「朝鮮民族芸術館」を開設して、蒐集品をそこに展示しました。宗悦の目的は、朝鮮人に民族の誇りを蘇らせ、朝鮮文化の啓蒙に寄与することでした。

柳宗悦（1889-1961）　1954 年頃

それまで見向きもされなかった李朝の陶磁器は、これを契機に高級品として扱われるようになり、今では高嶺の花となっています。

今回の旅では、高麗青磁の窯元を訪れました。そこで象嵌の製作工程を見学しました。併設された売店には、みやげ用の青磁器が並べてありました。ほしいものはありませんでしたが、ふと見ると、片隅にほこりをかぶった茶碗が数点ありました。その中に、興味をそそる抹茶茶碗がありました。

値札が付いてないので、オーナーとおぼしきおばさんに、これはいくらかと尋ねました。彼女が言うには、お客さんはお目が高い、これは先代の作品で、間もなく博物館に行くことになっている、よければ３０万円で売ってもよい、いずれ倍以上の値がつくのは間違いない、といいました。 誉められて悪い気はしませんでしたが、30万円では手が出ないので諦めました。

ソウルの仁寺洞は、アンティーク通りと呼ばれています。最終日の昼食前にこの通りを散策しました。

その名の通り、骨董店が軒を連ねています。陶磁器を扱う店もいくつかありましたが、品定めをするだけの時間がなく、ちょっと見しただけでした。

崔社長にご招待いただいた「龍水山」は、高麗時代の宮廷料理店として有名です。料理のすばらしさは別項で述べますが、インテリアも当時を彷彿させる高級感漂うつくりでした。室内の小卓にさりげなく一輪挿しが飾ってありました。なんとこれが李朝白磁でした。他にもないかと目を凝らすと、廊下の奥にこれまた李朝白磁とおぼしき大壺が置いてありました。

本当は近づいてよくよく見たかったのですが、帰りがけだったため、礼を失すると思い、ぐっと堪えました。国立博物館には行くことが出来ませんでしたが、ひょんなところで李朝白磁に出会うことが出来ました。

（2） 宮廷料理

今回の旅では、ビビンバやブルコギ、カルビなど日本でもお馴染みの料理をいろいろなキムチと共に、マッコリを飲みながら食べました。私が初めて韓国を訪れたのは約40年前ですが、その時はおかずの種類も少なく、ご飯は麦飯でした。それだけ貧しかったんですねぇ。隔世の感がします。

左2つは朝食です。右はKTXの弁当です。

料理とは別に、マッコリがこんなにうまい酒とは思いませんでした。わが町内に韓国通がいます。彼もリタイア組ですが、韓国を頻繁に訪れています。来年は留学も考えている韓国オタクです。その彼が時々町内の会合にマッコリをぶら下げてきます。すすめられて何度か飲みましたが、うまいとは思いませんでした。

ところが、韓国レストランで飲んだマッコリは実にうまかったです。韓国ではハウスワインならぬハウスマッコリがあります。自家製です。ちょうどキムチのアルコール版といった感じで、その店によってそれぞれ独特の味わいがあります。

壜ではなく、鉢に入ったマッコリをしゃもじで注いで飲むのが合っています。高級レストランの龍水山では、銀のやかんに入ったマッコリを飲みました。宮廷ではこれが流儀なのでしょう。“郷に入れば郷”で、朝鮮料理にはマッコリがぴったしです。

朝鮮料理は唐辛子をふんだんに使った辛い料理が特徴ですが、宮廷料理は王侯貴族が食しただけに、繊細でまろやかで、深みがあり、彩りも鮮やかです。品数の多さにもびっくりします。龍水山の料理はどれも美味でしたが、最後に出た冷麺が絶品でした。

本来の宮廷料理は、日本の懐石料理のように、一品ずつ出てきますが、近年宮廷料理は手軽に食

べられるようになり、“韓定食”と言う呼び方で、豪華なコース料理をすべてテーブルに並べた形式になったようです。

龍水山は、伝統の流儀を守り、一品一品ウエイトレスが運んできました。それだけ格式の高い宮廷料理店ということでしょう。私が経験した中では、龍水山の宮廷料理はもっともすばらしい料理でした。

4. むすび

２３年ぶりに訪れた韓国の印象を、大きな変化があったと述べました。この変化が韓国の人にとってよい変化なのか、悪い変化なのか外国人にはわかりません。

この見聞録では、三国時代の日朝関係を振り返りました。この時代が両国にとってきわめてよい関係であったことを改めて確認しました。日本は朝鮮から多くのことを学びました。朝鮮はわが国にとって恩師ともいうべき存在でした。

それが秀吉の朝鮮侵攻、特に日韓併合時代の思い出は、韓国人に反日感情を決定づける要因になりました。それは「歴史認識」と「教科書問題」という形で未だに尾をひいています。この是非をここでは論じませんが、韓国の教科書に記載された記述を引用し、むすびに代えたいと思います。

今回もお読みいただきありがとうございます。

「韓国の歴史新版」（国定韓国高等学校歴史教科書　2003年2月発行）

『今日、わが社会はかつて経験したことのない価値観の混乱と葛藤を経験している。伝統的価値が社会の急速な変化によってその影響力と説得力を失いつつあり、西欧社会の価値概念が無批判的に受け入れられる風潮が生じている。とりわけ近代化がただちに西欧社会を模倣しているとみなしていた人びとは西欧の間違った価値概念までも受入れていた。そうして、今日わが社会は価値観の大混乱状況を経験している。

伝統的にわが社会は人格と廉恥を重んじるとともに、人間関係で礼儀を尊んできた。このような伝統的な価値観は産業化や都市化によって崩れ、個人中心の利己主義とさらには集団利己主義まで現れた。その結果、一部の人びとは基本礼儀を無視し公衆道徳まで軽視する風潮が生じた。そのため今日のわが社会では正しい価値観の確立が何よりも切実に求められている。』

完

参考文献

韓洪九 「倒れゆく韓国」 2010年　ソウル大卒、ワシントン大博士課程修了、聖公会大教授

尹健次 「もっと知ろう朝鮮」 2001年　京都大学卒、東大大学院博士課程修了、神大教授

全東椿 「近代のかげ、現代韓国社会論」 2005年　ソウル大学院博士課程修了、聖公会大教授

三橋広夫 「韓国・朝鮮の歴史Q＆A」 2002年　千葉市立花園中学教諭

韓国放送大学校歴史教科書 「韓国の歴史」 2004年

鈴木大拙他 「回想の柳宗悦」 昭和54年

なお、写真の大部分は丸橋さんから提供いただきました。記して感謝します。